

官能肉食小説

女子寮



大黒達也

官能人肉食小説『女子寮』

一・作品紹介

牧野 瞳、二十一歳。類まれな容姿を持つ女。

コンピュータデザイナーを目指し、商社を辞めて専門学校に入学する。

瞳は学内にある女子寮に入寮することになる。そこで彼女を待っていたものは……。

二・登場人物

牧野 瞳（マキノ ヒトミ）

美貌と極上の肢体を持ち、グラフィックデザイナーを目指す女。コンピュータ専門学校の女子寮で、彼女は陵辱の限りを受け、最後には……。

早乙女 由梨（サオトメ ユリ）

瞳に匹敵するほどの美女。同じ女子寮で、彼女も数々の辱めを受ける。最後には……。

上田 明菜（ウエダ アキナ）

瞳の同室の先輩。寮内で瞳や由梨にレズ売春を強要する。残酷な性格の持ち主。

橘 美保（タチバナ ミホ）、佐藤 恵美（サトウ エミ）

明菜の仲間達

三・目次

「女子寮」

第一章 儀式

第二章 肉奴隸

第三章 地下室

第四章 試食会

第五章 悪魔の宴

四・本編

第一章 儀式

場所は、東北地方に位置するX市の中心街。斬新なデザインの外観をもつコンピューターデザイン専門学校前に、一台のタクシーが止まった。中から、豊かな胸元が覗くタンクトップTシャツに、ミニスカートを穿いた若い女が下りてきた。トランクから大きなスーツケースを取り出し、運転手に軽く挨拶をして、専門学校の正面玄関に入っていった。

女は、正面玄関を抜けて、エレベータホールに入り、エレベータを使って校舎の四、五階にある女子寮に向かった。

牧野 瞳。二十一歳。短大卒業後、市内の商社に就職

したが、短大在学中に興味で始めていたコンピュータデザインへの夢が棄てきれずに、会社を一年で止め、専門学校に入学することとなった。

在学中はミスX市に選ばれるほどの美貌の持ち主であり、身長百七十センチと長身で、均整のとれたグラマーな肢体の持ち主であった。

午後八時、瞳は同室の先輩である美保と、夕食を済ませ部屋に戻った。食事前に風呂に入っていた。先に瞳がドアを開けた。中は真っ暗で何も見えなかった。美保に背中を押された。よろけるようにして数歩歩いた。ドアが閉められ、鍵がかけられる音を聞いた。瞳は暗闇の中に、数人の気配を感じていた。忍び笑いを聞いた。

「美保さん。どうしたんですか？電気をつけて下さい」

「るせえんだよ！」

バチツという鞭を打つような音を聞いた。声に聞き覚えがあった。四人部屋で最年長の明菜と思われた。

「これから、ここの決まりを教えてやるよ」

「……」

「着ている服を脱いで素っ裸におなり。早くしないか！」

再び鋭い鞭の音が室内に響いた。不意に背後から抱き

しめられ、両乳房を強く揉まれた。

「最高のオッパイだよ！」

先ほどとは違う声が、背後から聞こえてきた。別の手が、ミニスカートに掛けられ、一気に引き摺り下ろされた。パンティも下ろされ、足首から引き抜かれた。



今度は前から、剥き出しにされた股間に何かを押し付けられた。それは生暖かく柔らかい物だった。舌だ！それは強引に膣口をこじ開け、中に入ってきた。揉まれていた乳房が解放されたが、今度はアヌスに熱い舌を感じ

た。

瞳はベッドに横たえられた。照明がつけられ、この部屋の女達が興味深げに瞳の裸体を見詰めていた。

「いい身体しているね。惚れ惚れするよ」

明菜が舌なめずりをするように言った。それを合図に何本もの手が瞳の裸体を這いまわった。太腿を押し広げられ、臍を剥き出しにされた。

「きれいじゃん！」

「あんまり使っていないようだね」

周りの女達が、舐めるような視線を向けていた。

「いただきますーす」

明菜が、顔を股間に押し付けてきた。暖かい舌が臍に差し込まれた。

「うっ……。もう止めて！」

瞳は嗚咽を漏らしていた。同性との性的経験は皆無であつた。瞳の両手を押さえていた女達もきれいなピンク色をした乳首に吸い付いてきた。明菜が、舌先を微妙に震わせ、クリトリスを刺激してきた。寝ても崩れない形の良い乳房を揉まれながら、乳首を舌先で転がされた。うつ伏せに寝かされ、尻の膨らみを鷲掴みにされ、存分にアヌスを舐められた。

「この娘。感じているよ！」

明菜が嬉しそうな声を上げた。同性による壺を得た執拗な愛撫にいつしか、暗い欲情が身体の芯から湧きあがってきていた。知らぬ間に、自分から明菜の顔にアヌスを擦り付けていた。

「真弓、掘り出し物だよ」

瞳を連れた明菜が、部屋のドアを開けた。中では、寮生の女達が煙草や酒を飲みながら麻雀を打っていた。煙草の煙で息苦しいほどであった。

「よう。明菜。掘り出し物って？」

明菜は皆に見えるように、瞳を前に押し出した。

「新人の瞳だよ。どう美人でしょう。おっぱいも大きいし」

女達は麻雀を中断し、瞳の全身を舐め回す様に視線を注いだ。

「休憩しよう」

明菜に真弓と呼ばれ、その部屋のリーダー核と思われる女が、立ち上がった。瞳の前に立ち、Tシャツの上から、

豊かな乳房を鷺掴みにした。

「大きいね。それに凄く柔らかい」

頬を赤く染め、俯いている瞳の顎に指先を当て、上を向かせた。

「きれいな顔をしているね。特に目が美しい。女の私から見ても濡れてきちゃうよ」

瞳の目を濡れた視線で見つめながら、抱きつきミニスカートの手に手を入れてきた。パンティの上から、両手で豊かな尻を撫で回した。

「あんた結構大きいね。百七十センチぐらいあるでしょう。その上、これだけグラマーだと男はほっておかないわね」

言い終わるや否や、瞳の口に吸い付いてきた。強引に

舌で口蓋をこじ開け、舌を入れてきた。口の中を舐め回し、舌を吸出ししやぶられた。唾液を啜り取られた。瞳の大きな目から、一粒の涙が零れ落ちた。真弓は、暫くの間、ディープキスを楽しんだ後に、無言で瞳のミニスカートを脱がし始めた。瞳が、顔を強張らせて、真弓の腕を掴んだ。

「あんた達も黙って見ていないで手伝ってよ！」

真弓が言うと、女達は一斉に動き出した。一人が瞳の背後から羽交い絞めになると、真弓がミニスカートを引き摺り下ろした。パンティの上から、指先で膣を揉んで感触を楽しんだ後、舐めるようにゆっくりとパンティを尻から抜き取った。

「見て、見て。きれいなお尻よ」

「オママ*コだつて、きれいなピンク色しているわよ」

女達が、下半身を剥き出しにされて、嗚咽に咽び泣く瞳の前後で、立ち膝を付いて覗き込んでいた。何本もの手が膺やアヌスを這い回った。

「次はオツパイだよ」

乱暴にTシャツを脱がされ、ブラジャーを筆り取られた。木目細やかで白く柔らかな乳房が零れ落ちた。

「こんなきれいなオツパイ見たこと無いわ！」

「顔を埋めてみたい！」

女達が一斉に歓声を上げた。真弓が素っ裸に剥いた瞳を、麻雀卓の上に座らせた。大きく白い尻が麻雀パイを踏みつけにした。

「ストリップは五百円だったよね」

真弓は、俯いて嗚咽をあげる瞳の重たげな乳房を鷺掴みにしながら尋ねた。

「はい。それと本番は千円です。前金で頂きます」

「相変わらず、商売上手だね」

麻雀卓の上に仰向けに横たわる瞳の太腿を大きく押し広げ、衣服を着た真弓が、ピチャピチャと嫌らしい音を立てながら臈やクリトリスを舐めていた。周りで見ていた女達も瞳の乳房を指や舌で弄んだ。堪らなくなっ
て自慰をする者もいた。今度はうつ伏せにして、剥き卵の
ような白い尻を舐め始めた。



瞳は嗚咽を漏らしながらも、為すがままだ。真弓は、暫くの間、無心にアヌスを舐めていた。瞳の泣き声が次第に喘ぎ声へとかわっていった。真弓が立ち上がり、着ていた服をすべて脱ぎ捨て全裸になった。贅肉の無い瑞々しい裸体が現れた。乳房はBカップぐらいであり大きくはないが、きれいな形をしていた。タンスの引き出しから、極太のペニスバンドを取り出して身に着けた。ベッドの上で、ぐったりとして動かない瞳の背後から覆い被さっていった。

膣に根元まで一気に押し込んだ。仰け反り鋭い喘ぎ声をあげる瞳の豊満な乳房を揉みながら、妖しく尻を前後に動かした。周りで見えていた女達も堪らなくなったのか、衣服を脱ぎ捨て抱き合い、膣やアヌスを弄りあった。瞳

は、その部屋でしたい放題に犯された後、次の部屋に連れ込まれ、寮生達に同様な陵辱を受けた。

入寮したその日は、結局翌朝まで女達に嬲りにされた。翌朝、寮生のベッドで両側から二人の女に抱かれた状態で目覚めた。明菜がやってきて、瞳は全裸のまま連れ出された。その足で、浴室に連れて行かれた。誰もいない筈の浴室には、明菜の中間達が待ち構えていた。明菜が、瞳の黒髪を引き摺るようにして、湯がはられた浴槽に頭から落とし込んだ。浮き上がりとしたところを、明菜達が上から押さえつけた。大量の水を飲み込み、意識が薄れ掛けたころ、浴槽から引き摺り出された。タイルを敷いた床に、仰向けの姿勢で寝かされた。両手両足を押さえつけられた。両足を大きく広げられ、膣を剥き

出しにされた。

ボディシャンプーがついた手で、股間を触られた。陰毛を扱かれ泡塗れにされた。明菜が、安全カミソリで、陰毛を剃り始めた。

「止めて！何するの！」

「きれいにしなけりやね。いっぱい稼いでもらうんだよ。おっと。あんまり動くとクリちゃんを切っちゃうよ」

大人しくなった瞳の乳房や尻を女達は愉しげに撫で回した。剃毛が終わると、部屋に連れ込まれ、女達にしたい放題に廻られた。

第二章 肉奴隸

第三章 地下室

第四章 試食会

第五章 悪魔の宴

完